
望みと信念を胸に

白銀の戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望みと信念を胸に

【Zコード】

Z3804W

【作者名】

白銀の戦士

【あらすじ】

ここは異世界『リールセムラン』

今この世界である異変が起こる。

そしてその異変に立ち向かう者達が存在する。

それぞれの望みや信念を持つて・・・

世界観&主な人物紹介（前書き）

この話では登場人物の性格が原作とは多少違うかもしれません（特に億超えルーキーが）
それでもよろしければどうぞ。

世界観＆主な人物紹介

世界観

世界の名は『リールセムラン』

様々な国があり、様々な種族が暮らしている。古代の遺跡が数多く存在する

国紹介

シーライン

ネル以外の『麦わら色の瞳』のメンバーの故郷。大小様々な国（島）が一つに集まつた連邦国家。國同士の移動方法は主に船。悪魔の実の能力者が多数いる。

あまり他の国からの干渉は受けていない。

ジャイル国

万屋『銀ちゃん』と近藤達の故郷。十数年前までは鎖国してたが、強大な力を持つ異国民により開国した。数年前に革命が起こつたが、失敗に終わり数多くの革命軍の者が命を落とした。

レンス国

タイキやバアルモン達の故郷。人間、デジモン、獣人、エルフなどの様々な種族が暮らしている国。数年前からバグラ帝国に攻撃され、ある事情から、現在は人間とエルフが住む『陽部』と獣人とデジモンが住む『月部』に分けられている。

ガゼル王国

ネルの故郷。魔導が発達した国。

バグラ帝国

デジモンのみが暮らす帝国。数年前からレンス国のかつての『月部』に攻撃している。

キムラスカ王国

ルークの故郷。ガゼル王国と同じ魔導が発達した国。スコアと呼ばれる預言に忠実。

マルクト帝国

キムラスカの隣国。こちらも魔導が発達した国。

ヒノモト

政宗達の故郷の島国。数年前までは小国に分けられ戦乱が続いていたが、現在は多くの国が同盟して、危うい均等を保っている。国民の中には『バサラ』と言われる力を持つ者が存在している。

登場人物紹介

モンキー・D・ルフィ

ギルド『麦わら色の瞳』のリーダー。伝説の宝『レイフレス』を見つけるのが夢。

ゴムゴムの実の能力者。仲間の事を大切に思っている。

麦わら帽子は憧れの人物から預かつた大切な物。義理の兄がいる。

ロロノア・ゾロ

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。大剣豪になるのが夢。
三刀流の使い手。極度の方向音痴。

ルフィには借りがあるらしい。

ウソップ

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。勇敢な戦士になるのが夢。
ルフィとは幼馴染。スゴ腕の狙撃手。

ニーハ・ロビン

ギルド『麦わら色の瞳』の一員。ある古代文明の謎を解くのが夢。
その古代文明と『レイフレス』が関係している事からルフィと協力
している。

遺跡などの先人達の思いを壊す者を許さない。ハナハナの実の能力
者。

ネル（マクシミリアン・ネルガル）

ルフィ達が出会った謎の青年。魔導師。
左目を札で封じられ、魔術の力も制限されている。

後にギルド『麦わら色の瞳』に入る。かなり運が悪い。

ユースタス・キッド

ギルド『レッド・スカル』のリーダー。数々の問題を起こしている。夢はルフィイと同じ『レイフレス』を見つけること。その夢を馬鹿にした者には危害を加えていた。

同じ夢で気に入ったからカルフィイは仲間以外で気を許せる存在。悪魔の実の能力者。

キラー

ギルド『レッド・スカル』の一員。短気なキッドの抑え役でもある。常にマスクを被つており素顔はキッドしか知らない。ドレークとは一度戦った事があるらしい。

古代語は多少は読める。

トラファルガー・ロー

謎の医者。その腕はチョッパーと同じかそれ以上。

キッドとは一度戦った事がある。様々な国を潜水艦で放浪している。悪魔の実の能力者。

ディエス X・ドレーク

謎の男。元海軍少将。

ローレライ教団の大詠師派を酷く憎む。普段は傭兵や用心棒などをしている。

悪魔の実の能力者。

バジル・ホーキンス

『魔術師』と呼ばれている呪術師。彼に頼めば呪つた相手は必ず不幸になると言われている。

自分と他人の運命を占うことができ、人の死相が見えるその力が異端とされ迫害を受けていた。

悪魔の実の能力者。

スクラッチメン・アブー

ギルド『オンエアステージ』のリーダー。数々の楽器を奏でる事が出来る。

敵は怒らせて逃げるがモットー。キッドとは一度戦った事がある。悪魔の実の能力者

坂田銀時

万屋『銀ちゃん』の一員。基本的にまともな人。自分の信念を貫く。実は以前革命軍に入っていた。

志村新八

万屋『銀ちゃん』の一員。基本的にまともな人。自分が銀時達より弱いと思っている。実家は剣道場。

神楽

万屋『銀ちゃん』の一員。傭兵種族『夜鬼』の娘。ルフィと同じ大食。兄がいる。

桂小太郎

元革命軍。銀時とは古い付き合い。
謎の生物エリザベスを連れている。

近藤勲

ジャイル国。騎士団の隊長。新八の姉お妙のストーカー。
多くの隊員に慕われている。剣もスゴ腕。

土方十四郎

近藤の隊の副隊長。銀時とは犬猿の仲。
近藤を信頼している。沖田とはかなり仲が悪い。

沖田総悟

近藤の隊の隊員。闇魔法と呪術が使える。

近藤を慕っている。土方の抹殺を企んでいる。

山崎退

近藤の隊の隊員。隠密術に優れている。
運が悪い。新八と仲が良い。

お妙

新八の実の姉。酒場で働いている。

近藤のストーキングが悩みの種。強い。

伊達政宗

ヒノモトの武人。小十郎と共に国の異変を探つてゐる。

六爪流の使い手。料理が得意。

幸村とは宿命のライバル。

真田幸村

ヒノモトの武人。主君の命で佐助と共に国の異変を探つてゐる。
熱血漢。主君武田信玄を心から尊敬してゐる。

政宗とは宿命のライバル。

片倉小十郎

ヒノモトの武人。政宗と共に國の異変を探つてゐる。
政宗に忠誠を誓つてゐる。剣の腕は達人級。
キレると怖い。

猿飛佐助

ヒノモトの忍。幸村と共に國の異変を探つてゐる。
苦労人なため新ハと氣が合つ。忍としての腕はスゴ腕。

長曾我部元親

ヒノモトの武人。國の異変を探つてゐる。
仲間から信頼されている。ルフィと氣が合つ。
航海術も多少は出来る。

工藤タイキ

レンス国『月部』防衛団『コードラン』の隊の一つ『クロスハート』の隊長。

風魔法と特殊な力『デジクロス』が出来る。再び国が一つになる事を望んでいる

シャウトモン

クロスハートの一員、自称タイキの相棒。

月部の平和を望んでいる。デジモンと獣人を見捨てた『陽部』を恨んでいる。

バアルモン

元『クロスハート』の一員。普段は無口で無表情。ある人物を追っている。タイキは数少ない信頼できる人間。

ベルゼブモン

『クロスハート』の一員。バアルモンの双子の兄。とても強い戦士だったがある戦いで命を落としたと言われている。

メルヴァモン

『クロスハート』の一員。姉貴肌。ベルゼブモンとは恋人同士だった。

ルーク・フォン・ファブレ

イオンの護衛をしている。『超振動』と言う力を持つ。かつてある『過ち』を犯した。過去の彼を知っている人は過去のルークとはかなり違うらしい。

ティア・グランツ

ルークと共にイオンの護衛をしている。ルークの『過ち』を知っている。

『譜歌』と呼ばれる特殊な歌を使える。以外に可愛いものが好き。

イオン

ローレライ教団の導師。キムラスカの国王に直接会つため旅をしている。
ルークとは友人同士。

世界観＆主な人物紹介（後書き）

作者「どうも！作者の白銀の戦士です！」

銀時「ついに書いちましたな。大丈夫なのかクロスオーバー学園まだ終わつてないだろ。」

作者「どっちもやつてやるさ！」

銀時「そういうや登場人物でいなかつた麦わらの一昧や武将などは？」

作者「ちゃんとでますよ！こんな作者ですがよろしくお願ひします！後クロスオーバー学園も読んでくださいね！」

銀時「何ちゃつかり宣伝してんだテメー！」

第一話 麦わら色の瞳

様々な種族が暮らす世界『リールセムラン』この世界には数多くの国が存在する。

その国の一ツジヤイル国の東部に、アムレといつ小さな町がある。アムレの後方には高い山があり、そこには悪名高い盗賊団のアジトがあるため、普通の人々は近寄る事さえも出来なかつた。

「おっさん娘を返せ！」

そんな盗賊団のアジトで麦わら帽子を被り顔に傷がついた少年が叫ぶ。その少年とその仲間らしき3人の男女は盗賊団に囲まれているが、気にもしていない。

「何を言つている？」

その少年の前には、盗賊団のボスらしき男が立ちはだかる。
「テメエら町長の娘を攫つて、そいつを人質にして、町の奴らに騎士団に通報させる事なく金とか奪つてるんだろ？」

声を発したのは、麦わら帽子の少年ではなく、その隣にいる緑の髪で腰に3本の刀を差した青年だ。

「テメエら騎士には見えねえな。町長が傭兵を呼んだ様子はねえし。

「俺達はギルドだ！」

麦わら帽子の少年が言つ。その言葉に盗賊団のボスはニタリと笑う。
「はつ。ただのギルドかよ。町長もこんなガキ共に頼むなんぞ血迷つたんだな。」

「お、俺達をなめるなよー。ちつと、ちよ、町長の娘を返さねえと痛い目を見るぞー！」

声を震わせながら言つたのは長鼻の少年だ。

「そりかよ。だが痛い目を見るのはテメヒらの方だ。」

その後

チュドオオン

どこからか銃声が聞こえ、銃弾が麦わら帽子の少年の胸に当たった。

「ハツ！ 対した事ねえな！ オイお前ら残りの奴らを片付ける！」

盗賊団のボスの言葉に彼らを囲んでいた盗賊団が武器を構える。

その時

ギュウウン！ ドッ

麦わらの少年に当たつた弾がはね返り、壁に当たつた。

「なつ。」

盗賊団の誰もが動じた。

「きかねえよ。」

麦わら帽子の少年は笑いながら言った。胸には傷どころか血さえも出ていない。

「お前！ 一体！」

驚きながら、盗賊団のボスは聞く。

「俺はゴムゴムの実を食つたゴム人間だ。」

麦わら帽子の少年は言つ。

「ゴムゴムの実？」

「まさか。悪魔の実か！」

「おいあればただの噂じゃなかつたのか！？」

盗賊団からはざわめきがあがる。

「騒ぐな！ 悪魔の実の能力者だろうと相手はたつたの4人！ やれ！」

盗賊団のボスの声で、盗賊団は再び武器を構え、襲い掛かる。

「さて、どうするルフィ？」

緑の髪の青年は麦わら帽子の少年、ルフィに聞く。それは質問ではなく合図だ。

「野郎共！ 行くぞ！」

「「「おうーー（ええ）」「」」

ルフィ達も武器を構え攻撃する。

「『ムームのピストル！』

ドゴッ

ルフィは後ろに腕を伸ばし戻る勢いにより、衝じる力で4、5人の盜賊を一度に倒し

「はああ！！」

ズバッ

緑色の髪の青年、ゾロは三刀流の構えで、盜賊団を倒し

「くらえ！火薬星！」

ドゴッ

長鼻の少年、ウソップはパチンコで盜賊団を倒し

「クラッチ！」

ゴキッ

黒髪の女性、ロビンは彼女の能力で、盜賊団の体に腕を生やし関節技で倒す。

わずか数分で彼らを囮んでいた盜賊団は全て倒された。

「ば、馬鹿な。」

「残るはお前だけだ。」

ルフィは盜賊団のボスに腕を突きつける。

「ハッ、確かにまともじゃかてねえな。そつまともじやなきやなー。」
盜賊団のボスは一人の少女を腕で引き寄せ、首に剣を突きつける。

「アイツは」

それはルフィ達が見た写真に写つてあった町長の娘だ。

「このガキの命が惜しいよな？」

「きたねエぞ！」

ウソップが言うが盜賊団のボスは笑い飛ばす。

「何だつてするせー。わあどうする。」

「・・・」

ルフィ達は沈黙する。しかしロビンは腕を交差する。

「おい！妙な真似は」

そう言いかけた時

ニコル

盗賊団のボスの体に一本の腕が生え、次の瞬間
ゴキッ

「おー」おー！」

少女を押さえていた腕を曲げてはいけない所まで曲げ
少女を逃がした、

「し、しまった！」

腕を押さえながら、ふと前を見ると、ルフィイが目の前に迫っていた。
「なつ。」

「ゴムゴムの～ピストル！」

ドゴッ

ルフィイは盗賊団のボスを後ろの壁まで吹っ飛ばした。

「大丈夫か？」

ルフィイは笑顔で少女に聞く。

「うん！」

少女は満面の笑みを浮かべる。

「こいつらの事は町長に任せるとか。」

「だな。俺達の依頼は町長の娘を取り返す事だし。」

ゾロとウソップが言ひ。

「お、お前ら一体。」

からうじて意識は残っていた盗賊団のボスは聞く。

「聞きたいか？俺達はな」

ルフィイは麦わら帽子を押さえながら言ひ。

「ギルド『麦わら色の瞳』だ！」

第一話 麦わら色の瞳（後書き）

作者「どうも、作者と」

銀時「銀さんです。つてかこの雰囲気クロスオーバー学園の後書きの雰囲気と似てるな。」

作者「それは言つな。」

銀時「つーか。俺の出番いつなんだよ。」

作者「もう少ししたら出るからな。では次回お楽しみに！」

第一話 ギルドと魔導師

アムルの町 町長の家

「娘を取り返してくださつて、本当にありがとうございました。」

「ありがとうございます！お兄ちゃん達！」

「シシシシ。いいつて、飯をくれた礼だし。」

アムルの町の町長が、ルフィ達に礼を言つ。ルフィ達は森に迷つてしまい、食料が尽きた時にアムルの町に着き、町長に食料をもらい、その礼として町長の娘を取り返す依頼を受けたのだ。

「それで、報酬ですが。」

「いいつて！お礼なんて。」

ウソップが断るつとするが

「そろはいきませぬ。これを受け取つてください。」

そう言つて、報酬として銀色で中央に黒い宝石がついた腕輪をもらつた。

「何だ？これ？」

「何やら魔術が主流の国から届いた物らしいのです。」

「という事は、ガゼルかキムラスカ辺りね。」

とロビンが言う。

「でもいいのか？貰つて」

「ええ。この町を盗賊から開放してくださつましたし。それくらいの礼はしませんと。」

「そうだわ。一つ質問があるのでだけれど。」

ロビンが聞く。

「何ですか？」

「盗賊達がアジトにしていたあの山に古代遺跡があるって聞いたのだけれど。」

「ああ。山の中腹にあると。まさかそこに行くのですか？」

「ええ。」

すると、町長の顔が青くなる。

「やめておきなさい！あそこはあの盗賊達が行つて逃げ帰った場所なのですよー。あなた方がいくら強くとも。」

「心配すんなよ。俺達強いし。」

「あ。」

ルフィ達は自信満々に言つ。

「大丈夫だよお父さん！お兄ちゃん達すつしく強いんだよー。娘にも言われ

「分かりました。そこまで言つながら地図を差し上げましょう。ですが無茶はなさるな。」

「おう！」

その翌日 ルーク達は宿に泊まり、町で準備をしてから遺跡へと向かう。

町長の話によれば、町から遺跡まで一日半はかかるらしい。

「おじロビン。その遺跡が例の古代遺跡なのか？」

夕暮れ時、山の中ゾロガロビンに聞く。

「さあ。私もそれが何の遺跡かまでは聞いたはないわ。」

「おい。」

「まあいいじゃねえか。そこに『レイフレス』の手掛けりがあつてもなくとも。」

「それでいいのかよ。」

ウソップがつっこむ。

「でもただの遺跡じゃない事は確かね、その遺跡今まで最深部まで行つた人はいないと言っているし。」

「おい。大丈夫なのか？うつ々々に危険な遺跡には行つてはいけない病が。」

そう会話をしていると

ドサッ

「えつ？」

突然ルフィ達の目の前に一人の男が倒れた。

「おい！大丈夫か？」

ルフィがその男に駆け寄る。青い服で黒いズボンを履いた黒い長髪の男だ。左目には包帯が巻かれてある。

「どうしたんだ？」

「狼がなんかに襲われたんだろう。」

ウソップとゾロが言う。ルフィ達も盗賊のアジトに行く時に戦つたからだ。服の所々が小さく破れている。

「う、うう」

「おい！しつかりしるー。」

「み、・・・」

「み？」

「水と・・・食料を。」

「助かりました。」

夜になり、ルフィ達は薪に火をつけ、野宿することにした。
「狼に襲われて、その後盗賊から逃げて、丸一日飲まず食わずに山をさまよっていたんです。」

「丸一日も、何も食わなかつたのか！？」

「いや。そこかよ。にしても運が悪かつたな。多分昨日俺達がその盗賊団を倒す前だしな」

ウソップはルフィにつっこんでから、男に言つ

「はい。そうですね。そういうえば、皆さんのお名前は？」

「俺はモンキー・D・ルフィ。よろしくな！」

「ロロノア・ゾロだ。」

「俺はウソップ。よろしくな。」

「ロビンよ。あなたは」

「俺は・・・」

「?どうした？」

ウソップは言つ。

「いえ！俺はネル。よろしく。」「ネルか。よろしくな！」

「はい。」

「それで、ネルはなぜこの山に来たの？」

「確かに、この山には盗賊がいたしな。普通は来ねえし。」

ロビンとゾロが聞く。

今頃あの山賊達は騎士に捕まり、牢屋行きだろ。

「来たというか、ここに来てしまったというか。」

「えつ？今何て」

ウソップが聞く。

「あっ！いえ。ちょっと迷つてしまつてここに、」

「お前迷子なのか。ゾロみたいだな。」

「誰がだ！」

ルフィの言葉にゾロが睨む。

「じゃあ。どうか行くところあつたのか？」

ウソップが聞く。

「いえ、特には。」

「じゃあさ。朝になつたら、俺達と一緒に遺跡に行こうぜー。突然のルフィの提案に

「えつ？遺跡？」

ネルは戸惑いを隠せないようだ。

「おいおい。」

「まあ。一人増えようが変わらねえしな。」

「そうね。」

「・・・分かりました。俺は行くところないですしね」「よつしー！」

ルフィの嬉しそうな笑顔にネルも微笑む、そして

（今行つても、役にたちそうにないし・・・どうか無事で、）
ネルは、大切な人達の事を思つ。

第一話 ギルドと魔導師（後書き）

銀時「そういうや何で、ネルガル（ネル）は偽名を使つたんだ？」

作者「それは、後々分かつてきます。」

銀時「そういや。お前つてネルガルの紹介で封じられた目が左目なのに右目と間違えたんだよな。」

作者「ギクッ。」

銀時「んなの。アレだ政宗の眼帯をしている方の目を右目なのに左目に間違えるような。」

作者「言つた！自分でも気にしてるんだ！それに書き直したよそこ！」

銀時「こんな作者ですがよろしくな。」

作者「また次回。」

第三話 遺跡に集いし者達

「着いたぞ！」

翌朝、ルフィ達は出発して、ついに遺跡に到着した。山の壁に掘られた石造りの入り口がある。

「大きいな。」

ネルは咳く。ロビンはすぐにその入り口に近づき、観察する。

「どうだ？ ロビン。」

ウソップが聞く。

「ええ。この構造からして、あの古代文明の遺跡ね。」

「よし！ 入つて見ようぜ！」

「気をつけるよ。何か仕掛けがあるかもしれないしな。」

ルフィ達は遺跡に入った。

「何も起きないな。」

ウソップは持つてきたカンテラを持ちながら言う。遺跡は一本道だ。唯一の明かりはカンテラだ。

「油断するなよ。」

ゾロが忠告したその時

キキッ！

何かの大群がルフィ達の目の前に迫ってきた。

「ゴムゴムのピストル！」

ドゴッ

キイツ！

ルフィはその何かの一匹を打ち落とした。それは大きなコウモリの魔物だった。

「ここには、魔物もいるようね。」

「気をつけて行こう。」

ウソップがそう行った時

ガコツ ウソップの歩いていた場所の石の床の一部が下に下がる。

「危ない！」

ネルは何かを察したのか、ウソップを押す。

ビシュッ

ウソップの立っていた場所に数本の矢が右側の壁から来た。

「あ、あぶねえ～。」

「気をつけて進もう。」

ルフィ達は再び歩き出す。

「そういうえば、ルフィ。」

「何だ？」

ネルがルフィに聞く。先程まで多くの罠や魔物があつたが、問題なく進む

「ルフィ達は、何でこういう遺跡に行くの？」

「ああ。俺はな『レイフレス』を探してるんだ！」

「『レイフレス』ってあの伝説の宝?」

「そうだ！」

ネルも聞いた事がある。『レイフレス』は伝説の宝と呼ばれ、その正体は全くの謎。どこにあるのかも分からず、それを見つけたのは、ある海賊団を除いて誰もいないらしい。そのためか『レイフレス』の存在は多くの人にとつてはただの作り話とされているらしい。

「俺は絶対に『レイフレス』を見つけてみせる。」

「じゃあ。ゾロさん達は?」

「俺は、大剣豪になるために」

「俺は、勇敢な戦士になるためだ！」

「私は、ある古代文明を追っているの、それが『レイフレス』に関係していると思つて」

「皆それぞれ目的が違うんですね。」

「別に一緒じゃねえとダメって訳じゃないしな。」

そう話していると

ドゴッドゴッ

何かがルフィ達に近づく

「何だ？」

ルフィ達は構える。近づいて来たのは、灰色の石の体をした巨大な人形だ。三体はいる。

「これは、ゴーレム！」

「何で！？ 前に別の遺跡に行つた時はこんなのがいなかつたよな！」

「恐らく、ここに遺跡を造つた人達は、魔術を少し使つていたのかもね。」

「理由は後で考える。とにかく倒すぞ。」

「ああ！ ゴムゴムのバズーカ！」

ドゴッ ゴーレムの一体は吹つ飛ばされるが、ゆっくりと起き上がり、再び近づく。所々に亀裂がはしつてている。

「一筋縄じゃいかねえようだな！ 鬼斬り！」

ズバツ ゾロは、ルフィが吹つ飛ばしたゴーレムとは別のゴーレムの左腕は斬るが、まだ動く。

「火薬星！」

ドゴッ ゴーレムに当たつて爆発するが、表面が焦げたくらいだ。

「私の技は通じなさそうね。」

「皆少し下がつて。」

突然ネルがそう言つ。見ると、ネルは何かの延唱を行つており、ネルの周りは光つている。

「ネル？」

ネルの延唱が終わると同時に、
ゴオ

巨大な火の玉がゴーレムに直撃し、ゴーレムが倒れる。先にルフィが攻撃したのが合わさつてか、ゴーレムは立ち上がらない。

「スッゲエ！」

「お前一体。」

「ルフィー！ ウソップ！ 油断するんじゃねえ！ まだ残つてている！ 虎狩

り！」

「ああ！ゴムゴムのガトリング！」

ズバッ ドゴッ ルフィビゾロの攻撃で残りの一體も倒れた。

「にしても、スゲェぞネル！何なんだあの火の玉！」

ルフィイが目を輝かせてネルに聞く。

「いやたいした物じゃないよ。魔術だよ。」

「へえーあんな魔術つて初めて見たぜ。」

「シーラインは魔術使える奴はいねえしな。」

「出身地はどこ？」

「ガゼル王国だよ。」

「ガゼル王国つて、魔術が発達した国よね。」

ロビンが言う。

「あっ！だつたらよ。これ何か分かるか？」

ルフィイは町長にもらつた腕輪を見せる。

「これ、『カイリアン・アイ』だね。」

「何だ？それ。」

ウソップが聞く。

「魔導具の一つで、嘘や未来や過去などを見通す事が出来るんだ。」

「へえー。だつたらウソップの嘘がバレるな。」

「マジかよ！」

「でも、この力を発動するには魔導師が一人必要なんだ」

「ちえつ。」

ルフィイはつまらなさそうだ。

すると

「んっ？」

ゾロが振り向く

「どうしたゾロ？」

ルフィイが聞くが、すぐに何かが分かつたようだ。

「何か物音が聞こえる。」

その時

ドゴッ

突然入り口の方から、あの大きなコウモリの魔物が一体吹っ飛んできた。

「な、何だ！？」

ウソップが驚きの声をあげる。すると魔物が吹っ飛んで来た方向から光が近づく

「んつ？ 何だ麦わらか。」

現れたのは、赤い髪で頭にゴーグルをつけ、赤いファーポートを素肌で羽織った男と、金色の長髪で顔をマスクで覆い、水玉模様のシャツを着た男が現れた。

「キッド！ キラー！」

「久しぶりだな。」

ルフィとゾロが言う。

「目的は言つまでもねえか。」

赤い髪の男、キッドが言つ。

「ああ。って一緒に来てるのはお前だけか？」

「ああ。」

マスクの男、キラーは頷く。

「誰なんですか？ あの人達。」

ネルはロビンに聞く。

「赤い髪の男が、ユースタス・キッド。マスクを被つてるのが、キラーよ。キッドはギルド『レッド・スカル』のリーダー。キラーはそのギルドの一員よ。」

「ギルドだつたんですか。」

「んつ？ 見かけねえ奴がいるが誰だそいつ？」

キッドがネルを見る。

「ああ。昨日知り合つたネルつて奴だ。」

「よろしく。」

「まあ別に、いいが。それより、この奥にあるんだよな、何かが」

キッドはどこか楽しそうだ。

「ああ。」

ルフィも楽しそうな顔だ。一いつのギルドは一緒に遺跡の奥へと行く事にした。

その後も、手強い罠やゴーレムがいたが、ルフィ達は突破する。

「開けた場所に着きそうよ。」

キッド達と出会って十数分後、広場のような場所に着いた。たいまつがあつたので、ウソップはカントラの火を使い、たいまつに火をつけて行く。

広場の壁のは、何かの壁画が書かれてある。

「これって。」

ルフィは広場を調べていく。

ふとネルは、他の壁と何かが違う壁の一部分を見つける。

「何だろこれ？」

ネルがその壁の一部分を触ると

ガコッ

「えっ？」

触れた壁の一的部分が、突然中へと入った。

ゴゴゴ

「な、何だ！ 地震か！？」

突然広場が揺れる。すると広場の中央の壁画が、下へと下がる。そこには隠し部屋があつた。

「これは！」

隠し部屋の中には、何かの文字が書き込まれた大きな石版がある。

「やつたなネル！」

「これが、ルフィ達が探していた？」

「ああ。これに『レイフレス』の手掛けりがあればいいが。」

キッドが言う。

（ひょっとして、この人も）

ネルはそう思つたが口には出さなかつた。

「なあロビン！早く読んでくれ。」

「ええ分かつたわ。」

ルフィ達が隠し部屋に入ろうとする。

しかし

「！！あぶねえルフィ！」

ガキン

何かが、ルフィ達に迫つたが、ゾロが刀でその何かとつば競り合いになる。

「ゾロ！」

ウソップが叫ぶ。

ガキン

その何かは、少し後ろに下がる。

「何者だお前は。」

ゾロが言つ。その者は、黒い二角帽子を被り黒いジャケットを素肌で着ており、両手には、サーベルとメイスを持っており、目元は黒いマスクで隠されており、顎には十字傷、胸には×の刺青をつけた男だ。

「お前は。」

キラーが思わず言つ。

「知り合いか？キラー」

キッドが聞く。

「おいお前！急に襲い掛かつて危ねえじゃねえか！」

ルフィが言つ。

「・・・去れ。」

その男が口を開く。

「はあ？」

「その石版を読み解くな。それはお前達が知るべき事ではない。」

その言葉は静かだがどこか強い。何かの警告のようだ。

「なに言つてやがるテメエ。」

キッドが今にも突っかかって来そうだ。

「キッド。落ち着け。」

キラーが抑える。

「悪いが、そいつはきけねえな。」

ルフイが言つ。

「ルフイ。」「ネルは心配そうな顔だ。

「どうあっても退かないか。」

「ああ。俺達をここから退こうとするなら。」

グツ ルフイは拳を握る。

「・・・そつか。」

チャキ

そう言つて男はサーベルとメイスを再び構える。

「お前ら。手を出すなよ。こいつは俺一人で十分だ。」

「ああ。分かつた。だが油断するなよルフイ。」

「テメエ何勝手に決めてやがる。」

「キッド。こには麦わらに譲るぞ。」

「チツ。」

ルフイはそんなやり取りをした後、再び男を見る。今でもすぐに攻撃をしそうな雰囲気だ。

第三話 遺跡に集いし者達（後書き）

作者「次回はルフィとドレークの対決です！」

銀時「そういうや、お前つて億超えルーキー好きだよな。やっぱあいつらが初登場した時からか？」

作者「いや、その時はあんまり関心はなかつたよ。あつたとすればキッドとローぐらいかな。」

銀時「じゃあ何で興味持つたんだ？」

作者「実は二動である動画を見て、んで興味を持って、それで億

超えルーキーを調べてみたら」

銀時「はまつちまつたつて訳か。」

作者「そういう事だ。」

銀時「まああんま深く知りたくないなかつたがいいか」

作者「おいおい。ではっ！感想お待ちしてます！」

銀時「後、誤字・脱字あつたら教えてくれよ。」

第四話 遺跡での戦い（前書き）

作者「やつと更新でもしましたー。」

銀時「つたくおせえよ」

作者「しおりがないだろー色々と忙しかったんだからー。」

第四話 遺跡での戦い

「『ムムムのピストル！』

最初に攻撃したのはルフィだ。ルフィのパンチを男は右へ移動しかわす。

ダッ

男はルフィの懐まで素早く移動し、サーベルを振る。

「うおっ！」

ヒュン

ルフィが寸でで避けたため、サーベルは空を切つただけだった。

ストッ

ルフィは一旦後ろに退き、再び男に向かつて走り出す。

ヒュン スッ

二人共攻撃、避ける、退くを繰り返しながら戦っている。

「妙だな。」

ふとキッドが呟く。

「何がだ？」

ウソップが聞く。

「アイツまるで全力を出してるようにはみえねえ。悪魔の実の力もあんまり使ってねえし。アイツならあんな奴すぐに倒せるはずだが」確かにルフィの攻撃で悪魔の実の力を使ったのは最初に放った攻撃と数回ぐらいしかない。

「それはあの男も同じだ。アイツも全力を出している様には見えない。」

キラーはルフィと戦っている男について語る。

「何か全力を出さないというか出せねえって言つ感じがするんだが。

」

(それはやつぱ)

ゾロは一つ思い当たる事がある。そしてロビンもその理由が分かったようだ。そして

「あつ」

ウソップも気がついたようだ。

「くつ」

ルフィと男の距離は2、3メートル位離れている。いくら避けているとはいえた全ての攻撃を受けないという訳でもない。ルフィの腕にはとても小さな切り傷がいくつもある。それは男も同じ事、パンチをした時かすたが、男の腕に当たったような感覚がいくつかあった。

ダツ

再び男がルフィに向かってくる。しかも先程よりも速い。

ヒュ

「うおつ。」

メイスが先に斬りかかたが、ルフィの髪をわずかに斬るだけだった。しかし男にはまだサーベルがある。

ズバツ

「くつ！」

ルフィの左腕に傷が出来る。

「ルフィ！」

ネルが叫ぶが

「おりやつ！」

ルフィは左腕に傷を受けた瞬間、右腕でパンチをする。パンチは男に直撃した。

ドガツ

「ぐつ」

わずかだが男に隙が出来た。男は後ろに退いたが

「ゴムゴムのバズーカ！」

ルフィはすぐに追撃をした。

「くつ！」

シャキン

男はサー・ベルとメイスを交差させ防御する。

ドガツ

「ぐつ」

流石に防御しきれなかつたのか、男はダメージを受けているようだ。

ザザザ

ルフィはまだ勢いを落とさず、男は押されるように後退する。

ガツ

男が壁間に当たる。

「はあつ！」

ルフィは突進しパンチを放つが

ヒュッ

寸での所で止める。

「何故攻撃をしない。」

男が問う。

「だつて、このまま攻撃したらその壁壊れちまうだろ。」

それは当たり前だ。

「仲間と約束したんだ『出来るだけ、遺跡を壊さない』って」

それはロビンがギルドに入つた時にした約束。

「だからあんま全力を出さなかつたのか。」

「そうだな。」

キッドとキラーは呟く。ルフィが全力を出せば遺跡など簡単に壊れる。おそらくあの男も遺跡を壊さないために全力を出さなかつたのだろう。しかし男の場合は遺跡が崩壊すれば生き埋めになるからつと言つ理由だが、

「一つ聞こう。」

男がルフィに向かつて言つ。

「お前は何のためにあれに書かれてある事を知りたい？」

あれとは、あの石版の事だろ？

「『レイフレス』の手掛かりがあるかもしないからだ！」
ルフィは堂々と言つ。男も少し驚いている様だ。無理も無いとネルは思つ。『レイフレス』は多くの者にとつては単なる作り話だと思われているからだ。

「・・・あると信じているのか？」

「ああ！だから探す。」

ルフィは笑みを浮かべて言つ。

「・・・フッ。」

男も微笑する。

「テメエ。何笑つてやがる。」

キッドが突っかかるうとする。

「別にお前の夢を笑つていい訳ではないさ。ただ答えがあまりにも意外だつたからだ。」

もしかして、つとロビンは思つ、この男もアレの存在を、「もう、止めはしない。だがもしもこの石板に書かれている事が、お前達が望む事ではなかつたら、決してそれを求めるな。」

「？」

ルフィは首を傾げる。理解していない者もいるが、ロビンは気がついている様だ。

スッ

男は立ち去ろうとする。

「あつ！待てよー。」

ルフィが止める。

「何だ？」

「お前名前は何て言つんだ？」

少しの沈黙の後男が口を開く。

「ディエス・ドレーク。お前は？」

「俺はモンキー・D・ルフィ。」

「その名前覚えておくよ。ルフィ。」

「

スッ

男は、ドレークは去つていった。

「一体何者だつたんだろうね。あのドレークつて言つ人」
ネルが聞く。

「さあな。でも悪い奴じやなさそうだしな。」

ルフィイが言つ。

「あの男も去つたし、早速読んでみるわね。」

再びロビンは石版に近づき、解読しようとしている。

「ロビンさん。こんな難しいのを?」

「ああ。そういうテメエも読めるよな。」

ゾロがキラーに聞く。

「ああ。完全ではないがな。」

しばりくして

ロビンは石版の解読をし終えたようだ。

「どうだロビン?」

ルフィイが聞く。ロビンは首を横に振る。

「『レイフレス』の手掛けりは無かつたわ。」

「何だ。まあ別の所を探すまでだしな。」

「手掛けりねえならここに長居する理由はねえし。さつさと外に出
るが。」

ルフィイ達は出口に向かつて行く。

(あそこには書かれてあったのは、私達には必要ないこと。)

ロビンは心中でそう呟いた。石版に書かれてあったのは、ある『
兵器』についてだった。ドレークの不安が的中していたようだ。彼
は石版にその『兵器』について書かれているだろうと予想していた。
だから阻止しようとしたのだろう。

(それにしても、彼は一体……)

ロビンはさう考へながら出口へと向かつた。

「じゃあな。麦わらっこまでだな。」「ああ！また会おうな！」

遺跡から出て、ルフィはキッド達と別れた。

「そういうやネル。お前かれからどうするんだ？」
ウソップが聞く。

「え、そうだな。」

ネルは考えこんでるようだ。

（陛下の元に帰らないといけないけど、今の俺じゃそれに陛下の言葉も・・・）

ネルはある人について考えていた。

「行くとこないのか？」

「じゃあよ。俺達と一緒に来ねえか？」

「えつ？」

ルフィの突然の提案にネルは驚きを隠せない。つまり、ギルドに入ると言つ事なのだろうか。

「どうだ？ 皆？」

「つたくテメエは。だが別に構わねえよ。一人増えようが。」

「だな。俺も別に良い。」

「ええ。あなたはどうなのネル？」

ゾロ達も賛成のようだ。

「でも・・・」

ネルは考え込む

（今の俺は・・・でもルフィ達と一緒にいれば何か分かるかも知れない。・・・でもルフィ達に）

ネルは入るか入らないか悩んでいる。

「ネル？」

「迷惑じゃないのか？俺なんか入れて」

「んな事ねえよ。ネルの魔術すごかつたし！」

「・・・分かった。一緒に行くよ。」「

「よつしゃあああー、じゅあ宴しようぜー、ネル入つた祝いに」

「おい。どこでだ。」

「じゃあ改めてよろしくだなネル。」

「よろしくね。」

「はい。」

ネルはこつこりと微笑んだ。

第四話 遺跡での戦い（後書き）

作者「次回はいよいよ銀さん達が登場しますー。」
銀時「皆ー俺の活躍に注目してくれよなー。」

第五話 万屋『銀ちゃん』（前書き）

作者「今回も遅れてしまつて申し訳ありませんでした！」

第五話 万屋『銀ちゃん』

「それでこれからどうするんですか？」

「ネルが皆に聞く。ルフィ達は山を降りた後、あまり人通りがない
街道に出た。ここにはあまり魔物が出ないらしい。

「ジャイル国の首都、エドに行くわ。そこには用事があるしね。」
ロビンが答える。

「用事？」

「おうこれだ！」

ウソップは自分のバックから、赤い実を取り出す。「こいつはアオ
ブツて言う果物でこれを使って酒を作りたいからって試作品を作る
ために5個取つてこいつていう依頼があつたんだ

「そりだつたんですか。」

「おっ！見えてきた！」

前を見ると大きな町が見える。首都のエドだ。ほとんどの建物は木
造建築だが、中には立派な石造りの建物もある
ジャイル国はかつては鎖国状態で、限られた国と限られた貿易をし
ていた。しかし十数年前、ジャイル国に強大な力を持つ異国民に
より、鎖国が解禁され今では貿易が盛んな国となつた。アムルの町
も、異国民によって造られた町だ。石造りの建物は異国民や、国が
変わることに携わった権力のある者達の建物だ。

「じゃあ。酒場に行きましょうか。」

「ついでにさアイツらにも会おうぜ！」

「アイツら？」

ネルが聞く。

「エドにある何でも屋でそいつらとは顔見知りなんだ。」

「おもしれえ奴らだ！」

ウソップが答えた後ルフィが言つ。

一方

エドの町の一角かぶき町

「いいからさつさと家賃払えやこの天然パー・マ！」

「つるせえな！ないもんはねえんだよババア！」

そのがぶき町のある建物の一階で一人の人物が口論になつてゐる。

「はあ。またですか。」

それを階段から見ている眼鏡をかけた青年がいる。彼の名は志村新ハ。この建物の一階にある何でも屋『万屋銀ちゃん』で働いているのだ。そして今口論している天然パー・マの男はその何でも屋『万屋銀ちゃん』のリーダー、坂田銀時で、もう一人の高齢の女性はこの建物の大家で、建物の一階にある居酒屋の店主、お登勢だ。

「ちょっと二人ともいい加減。」

新八が止めようとした時。

ブン

銀時が、お登勢に投げられた。

「ぎやあああああ！！！」

銀時は新八に当たり、新八は階段から転げ落ちてしまった。

一方

「はいよ、これだよな。」

ここは酒場『すまいる』。ルフィ達は、以来の品を店主に渡してゐる。

「ありがとう。じゃあこれ、今回の以来の報酬だよ。」

店主は報酬の金が入った袋をルフィに渡す。

「ありがとな！」

ルフィ達は酒場を出た。

「酒場つてギルドの依頼とかも掲載されているんだぜ。」

ウソップはネルに聞く。

「へえ、ガゼルじやギルドってあんまり見かけないから初めて聞いたよ。」

「はあ。またですか。」

「まあ。あんまギルドを正式に認めていない国もあるしな。シーラインはギルドは無法者の集団ってイメージがあるし」ゾロが呟く。

「まあ、キッドの所は案外問題起にしてるけど。」「えつ？ そうなのか？」

「ええ。依頼人に危害を加えたり、建物を破壊したりなどね」ロビンが言つ。

その時

「おっ！ ルフィ久しぶりネ！」

ルフィ達に声をかけたのはチャイナ服を着た少女だ。

「よお神楽！ 久しぶりだな。」

「誰だ？」

「さつき言ってた何でも屋のメンバーだ。」

ゾロが答える。

「銀時や新八は元氣か？」

「もちろんネ！ 会いに行くアルか？」

「お久しぶりですルフィさん。」

ルフィ達は万屋『銀ちゃん』へ行き、銀時と新八と再会した

「よお！ ってかお前なんかボロボロだぞ？」「

「聞かないで下さい。」「でつお前ら、どうだ？ ギルドの状況は？」

銀時が聞く。

「相変わらず、来る所は来るけど、来ない時は来ない。もう一回酒場に行つて依頼を見てみるぜ。」

ウソツクが言つ。

「依頼が掲載されている酒場ってあんまりないですしね。うちも相変わらずです。ルフィさんの所の方がマシですよ。」「

「リーダーがちゃらんぽらんだからね。」

「それって何!? 僕が悪いって事か！ マジでハート傷ついたわ！」「

「落ち着いてください。まあそれは確かにそうですが。」「

「お前もかこの地味眼鏡！」

「誰が地味眼鏡だ！一番氣にしているんだぞ！」

「おいおい落ち着けよ。」

ウソツクが止めに入る。

「何だか個性的な人達だね。」

「面白い奴らだろ？」

ネルとルフィが話す落ち着いた所で新ハが聞く。

「それで、ルフィさん達はこの後どうするんですか？」

「酒場で依頼を見たら、宿屋に行つてくる。でつちよつとこの町にいてから、シーラインに行くよ。久しぶりにアイツと会いたいし」

「あいつ？」

「俺達の知り合いの医者だ。」

ネルの質問にゾロが答える。

「そうですか。」

「じゃあ久しぶりに、別の国の話教えろネ！」

神楽は目を輝かせる。

「僕らつてあんまり他所の国に行つたことないから。」

新ハが説明する。

「いいぞ！」

ルフィ達は旅の話をした（ルフィの記憶がうろ覚えだつたり、ウソツクの嘘が混ざつたりしたが、そこはゾロとロビンが訂正した）後、酒場で依頼を見た後宿屋に着いた。

翌朝

「ルフィ達つてシーライン出身だよね。」

「ああ。良いところだぜ。」

「シーライン行きの船は、ここから南西にある港町コーランよ。」

ルフィ達はコーランに向けて出発した。

その頃

「おはよ／＼ぞこまつす！」

「つおつ！何すんだテメエ！」

自分に攻撃してきた茶髪の男に向かつて言つ鋭い目つきの黒髪の男の名は土方十四郎。そしてその土方に攻撃をした茶髪の男の名は沖田総悟。

ここは、ジャイル国騎士団の御所の前、ジャイル国騎士団は、それぞれ隊に分かれており、土方はその中のある一つの隊の副隊長、沖田はその隊員だ。

「避けたかチツ。」

「おい！」

「よおトシ－総悟！おはよ／＼。」

大きな声で一人に向かつて言つのは、一人の所属する隊の隊長近藤勲だ。

「おはよ／＼ぞこます。」

「おはよ／＼ぞこます近藤さん。」

さつきまで、土方を殺そうとしていた沖田も挨拶する。ふと土方は、近藤が右手に何かを持っていることに気がつく。

「近藤さんそれは何ですか？」

「あつこれから？さつき他の隊の隊長から配られたのだが、他国の凶悪犯の指名手配書だ。」

「他国の凶悪犯の指名手配書がなんで配られたんですかい？」

総悟が聞く。

「何でも、この国に逃げてきているかもしれないらしくそれで配られたんだ。」

近藤は一人にその指名手配書を見せる。

「案外若いな。20代前半だな。」

「一体何したんですかいこの男？」

「お前達も知つてゐるはずだろ？数ヶ月程前、サシュ公国が壊滅したあの事件を。」

近藤の目が少し暗くなる。

「あの事件か。サシュ公国の城が吹き飛んで、首都は壊滅状態、大勢の人が死んだ。・・・まさかこいつが？」

「ああ。こいつはその事件を起こした犯人だ。」

「知つてますよ。確か暗黒魔導師って呼ばれてるんすよね。名前は聞いた事ありますが、こんな面だとはね。」

指名手配書には、『マクシミリアン・ネルガル』と書かれている。そして手配書にある写真に写っているのは・・・・・ネルだ。

第五話 万屋『銀ちやん』（後書き）

銀時「おいー何だよあの初登場のしかたーもつとカツ『よくやれよ！』

作者「あれくらいが銀さんに一度いい。」

銀時「んだとチクシヨー！」

作者「感想よろしくおねがいします。」

第六話 白毛戦士と黒の男（前編）

作者「今日は、オリキャラが登場します！」

第六話 白き戦士と黒の男

港町ユーラン

かつては漁業が盛んな町だつたが鎮国が解放された事により、様々な国や島を行き来するのに使う船を出すようになつた。ユーランに着いたルフィ達は、船が集まる場所に着いた。

「船がたくさんあるね。」

ネルは辺りを見回す。

するとルフィ達はある船が停まっている場所に向かう。

「あつ！ルフィ！」

少し遅れてネルが後を追う。

船の前にはオレンジ色の髪の女性が樽に座つて本を読んでいた。

「おーいナミ！」

ルフィイがその女性、ナミに向かう。

「ルフィイ！ゾロ！ロビン！ウソップ！久しぶり！」

ナミはルフィ達に向かう。

「久しぶりだな！ひょっとしてこの船」

「そつシーライン行きの船よ。」

ルフィ達は楽しそうに会話をしている。

「あつ！そうだ。実は新しい仲間が出来たんだ！」

「ネルです。」

「私はナミ、フリーの航海士よ。よろしく。」

「ナミの航海士の腕はかなりのもんだぞ！すぐにシーラインに行けるし。」

ルフィイが言う。

シーラインと他の国との間の海は荒れやすいのだ。さつきまで雲一つない青空でも、次の瞬間嵐になるなどよくあることだ。安全に行きたいのなら、かなり遠回りして、あまり荒れない海域に行くか、腕のいい航海士をつれて行くかどちらかだ。

「」の船商船らしくてね、急ぎの交渉らしく私を雇ったの。あんた
ら5人くらい船に入れても問題はないでしょ。」

「助かつたぜナミー！」

「ええ。だから」

ナミは手を出す。

「お一人様800ベリーね。」

ナミは笑顔で言う。

「ナミって金とかにうるさいんだよな。」

ウソップが呟く。

それから数時間後、シーラインの港町に着いた。ナミの腕は確かな
もので、腕のいい航海士でも、予測が難しいと言われるサイクロン
も乗りきれた。出発した時は、朝だったが、今は日暮れだ。

港町でナミと別れた後、ルフィ達はある場所へとむかつた。港町よ
り少し離れた場所で、周りにはあまり家がない所にぽつんと建つて
いる一軒の家。家の前にある看板によればどうやら診療所のようだ。
「ルフィ達の知り合いの人つて具合が悪いの？」

「いや。こここの医者だ。」

そう言うと、ルフィ達は裏口へと向かい

「おーいチョッパー！」

「その声って。」

診療所の中から声が聞こえ、扉が開く。

「ルフィー！ 皆！ 久しぶりだな！」

「おう！」

ウソップが言う。ゾロ達も嬉しそうだが、ただ一人驚きを隠せない
者がいる。ネルだ。

「おい。ルフィー」

「んつ？ 何だゾロ？」

「ネルは知らないだろ。」

「あつ」

「！」

チョッパーはネルの存在に気づき、慌てて扉に隠れるが、隠しきれていらない。

「それ、逆だよ。」

隠すのが逆なのだ。

ネルはそう言つた後、チョッパーを再度見た。ぬいぐるみのような丸い体で手足はトナカイのような形で指は蹄。頭には角が生えピンク色の帽子を被つている。

「安心しろチョッパー！ ネルは俺達の仲間だ。」

ルフィが言つ。

「そ、そうなのか？」

チョッパーはネルに近づく。

「はじめまして。俺はネル。」

「チョ、チョッパーだ。」

まだ警戒しているようだ。一方ネルは

(可愛い)

と思っている。

「チョッパーってお医者さんなんだよね。」

「そ、そうだけど？」

「すごいや。」

ネルは笑顔でそう言つ。

「ほ、ほめられたつて嬉しくねえぞコンニヤロガ！」

乱暴な口調とは裏腹に、顔は嬉しそうで体はくねつている。

「感情を隠せないのよこの子は。」

ロビンが言つ。すると

ガチャ

「どうしたチョッパー。」

奥にある扉から一人の男が出てきた。肌は青く髪は金色で頭は青いターバンを巻き、目は赤く右目は髪で隠れており、様々な札が貼つ

てある白いマントをつけ白いズボンをはき、右腕は巨大な銃だ。背はゾロより高い。

「あつ！駄目だろまだ完治してねえんだから！」

チョッパーはその男に駆け寄る。

「誰だそいつ？」

ルフィが聞く。

「今、俺の診療所で治療をしているんだ。アイツらは俺の知り合いだ。」

「そうか。」

「俺はモンキー・D・ルフィよろしくな！つでお前は？」

「バアルモン。」

無口な男だ。

ルフィ達は診療所の中に入った。この家には診療所でもあり、チョッパーが住んでいるのだ。ルフィ達は先程バアルモンが出てきた部屋に行く。どうやら数日位入院する者達の部屋でベッドが五つある。「チョッパーは俺やロビンと同じ悪魔の実の能力者なんだ。」

ルフィがチョッパーについて説明する。

「ヒトヒトの実っていう、食べたら人間に変身できるやつを食ったんだ。」

チョッパーが言う。

「じゃあ人間トナカイだね。それにしても悪魔の実って本当に色々あるんだね。」

「そういうや、シーライン出身以外で悪魔の実の能力者って聞いた事ないな。」

「盗賊達も、悪魔の実のことを伝説つて思つていたしな。」

ウソップとゾロが言つ。

「所でさ。」

チョッパーがネルに聞く。

「何で、撫でてるんだ？」

ネルはチョッパーの頭を撫でてたのだ。

「あつ！ごめん！いつの間にか撫でてた。」

ネルは手を引っ込める。ネルは可愛い物が好きなので、つい撫でてしまつたのだ。

「・・・。」

一方バアルモンは自分とは関係無しと思っているのか、会話に参加せず、少し離れた場所にいる。

「そりや。チョッパー。あいついつからくるんだ？」

ウソップが聞く。

「三日前だ。薬草採りに行つた時に浜辺で倒れていたんだ。でもあんまり自分の事話してくれないんだ。旅をしている事しか話してくれないし。」

「・・・。」

まだ黙つたままだ。

「あら。もう日が暮れていたのね。」

ロビンの言つ通り、日はすでに沈んでいた。その時

トントン

裏口から扉を叩く音が聞こえる。

「患者か？」

「でも、それだつたら診療所の方の扉から来るんだけど。」

「俺が、行つて来る。」

ウソップが扉を開けよつとする。

「一体なんのよう・・・。」

ゴッ

「なつ！」

ドサツ

突然ウソップが、吹き飛ばされ、背中から床に倒れる。ウソップは氣を失っている。

「ウソップ！」

ルフィ達が、ウソップに駆け寄る。開かれたドアからは
「何だアイツじゃないのか。」

白い髪で、黒いフードを着て、黒色の靴を履いた、青い目の中男がいた。

「お前！ウソップに何をした！」

「ふーん。6人いや、5人に一匹かな。アイツここにいるって情報
あるんだけど。」

「おい！ 聞いてるのか！」

ルフィが言う。

「何だようるさいな。そんな奴どうでもいいだろ。見たところ弱そ
うだし。」

「どうでもいいだと…ふざけんな！」

ルフィはその男に殴りかかる。

ヒュン

男は寸でで避ける。

「全く、魔術が使えない國の奴は乱暴者だな。だから来たくなかったのに。」

「お前は！」

奥の部屋からバアルモンが出てくる。

「おつ。発見やつぱり生きてたんだ。」

男はにんまりと笑う。

「バアルモン知ってるのか！？」

ルフィが聞く。

「少しだ。」

「じゃあ、早速。」

バツ

男がバアルモンに近づく。

「くつ！」

バアルモンは左手に持った赤い打振鞭で防御し、男を外へ吹き飛ば

す。

「中々やるね。」

「お前は確か俺に攻撃をした男と一緒にいた。」

「そつ、名前はクラントだよ。」

「おい待て！こいつの相手は俺だ！」

ルフィも外へ飛び出す。

「全くしつこい奴。君みたいな奴に興味なんてないんだよ。もう動かないでくれるかな。」

コオオオオ

クラントの周囲に黒い光が現れる。

「何をやってんだ！」

「させるか。」

ルフィとバアルモンがいつきに来るが
グアッ！

ゴッ

「ぐつ！」

黒い毛の巨大な熊のような魔物に阻まれる。

「どけよ！」「ム、ゴムのガトリング！」

「ギルティッシュ！」

ルフィは目にも止まらぬ速さの連続パンチで、バアルモンは札で攻撃して倒したが

「黒き束縛よ、我に仇なす者を封じよ。ブラックチェイン！」

ズッ

「なつ！」

「あの時と・・・同じ。」

ルフィ達は地面から出てきた黒い鎖で足を縛られた。

「これが君達との差だよ。さてと」

そう言つて、クレインはバアルモンに近づき、右手を置き何かの呪文を唱える。

ドッ

「ぐつ

ドサツ

鎖は消えて、バアルモンは倒れる。

「バアルモン！」

ルフィはバアルモンに駆け寄る。

「それは魔術でも解けないし、あれの材料は、キムラスカやマルクトぐらいしか生えてない。ここからキムラスカがマルクトだと一週間はかかるからもう間に合わないし、君はここまでだよ。」

クレインは意地悪そうな笑顔で言つた。

「お前…」

「全くうつむかしいな。君もむかつくからやりたいけど、もう疲れたし、君達の相手はこいつらでいいでしょ。」

そう言つた瞬間どこからか。魔物が現れた。

「何だ。こりゃ。」

「今のは召喚魔術だよ！でも魔物をどうせつぶす。」

ネルはかなり驚いている。

「じゃあね。」

そつ言つてクレインはどこかへ行こうとする。

「あつ！待て！」

ルフィは追いかけようとするが、魔物に道を阻まれる。クレインの姿はもう見えない。

「今はこいつらを先に片付けるぞ…」

「あ、ああ。」

ゾロの言葉でルフィは魔物に立ち向かつ。

第六話 白毛戦士と黒の男（後書き）

銀時「なあ。あのクレインとか言う奴。魔術がどうとか言ってたがあそこまで見下すってどういう事だ？」

作者「その理由は、次回わかります。さて、ウソップとバルモンはどうなるのか！次回もお楽しみに！」

第七話 魔術師

「ゴムゴムのバズーカ！」

「鬼斬り！」

「セインフルール。」

「氷の銃弾よ我に仇なす者を凍てつかせよ！フリー・ズライフル！」

「ベビー・ゴング！」

クラインが残していくた魔物達を、ルフィイは拳で、ゾロは刀で、ロビンは能力で、ネルは氷で出来た銃弾で、チョッパーは人型に変化して倒していく

「ふう。これで終わつたか？」

ルフィイが辺りを見渡そうとすると、

ブンッ

闇に紛れて隠れていた、黒いボロボロの服を着た黒い魔物が、黒い鎌でルフィイを斬ろうとする。

「はっ！」

「ルフィイ！」

鎌が、ルフィイに向かつて振り下げる瞬間

「はあっ！」

ズバッ

何者かが、二つの武器で魔物を倒した。

「大丈夫か？・・・お前は！」

「お前つてあの時の！」

それは、遺跡で出会つたドレークだ。

魔物は、ドレークが倒したあの魔物が最後だつたらしい。

「それにしても、人が魔物を操るなんて、とても容易な事ではないのだけれど。」

「おそらく、これを使って無理やり自分に従わせるようにしたので

しょう。魔物の背中についてありました。「

ネルは、四角い黒い機械を見せる。

「それより。ウソップとバアルモンだ!」

「ああ。そうだな。」

ルフィとゾロは言つ。

「おい。一体何があつたんだ？・・・って。」

ついさっき来たばかりで状況が飲み込めていないドレークだが、チヨツパーを見る。

「な、何だ？」

「た、狸?」「俺はトナカイだ!」

ウソップとバアルモンを中に入れる。

「つてか。何でお前があんなところに?..」

ゾロがドレークに質問する。

「用事があつてな。お前達には関係ない事だ。」

一方、チヨツパーはじつとウソップとバアルモンを診察している。

「一体どうなつたんだ?」

ルフィが聞く。

「おそらく、アイツが一人の胸に自分の手を置いた時何かをしたんだと思う。これが何か関係しているかも。」

チヨツパーはバアルモンの胸に刻まれた、黒い線で出来た円の内側に何かの模様が入った物を見せる。

「これって・・・呪術!」

ネルが気づく。

「知ってるのかネル!」

「うん。俺も一度だけ呪術師のお婆さんと出会つた事があるんだけど、相手に直接刻まれる呪術は、こういう風に円と円の内側に模様がつくつて言つてた!」

「ネルお前何とかならないのか?前に俺の怪我を治してくれたじゃない!」

ルフィは、ドレークと戦った後ネルに治療された時のことについている。

「直接刻まれる呪術は、普通の魔術じゃ無理だ。特殊な魔術じゃなきや・・・でも今の俺は」

(力を制限されてなければ)

「チョッパー！薬で」

「無理だ。呪術に効く薬は存在するけど、その薬草はキムラスカやマルクトぐらいしか、シーラインには生えてないし、それに採りにいって薬が完成するまで一人の体力が持つか。」

「ちくしょおお！」

ルフィは床を叩く。

(俺は、仲間が苦しんでいるのにも出来ないのか！)

ウソップとは、幼馴染なのだ。村は違うが時々一緒に遊んだり、それぞれの夢を語つたりとかしていた。そんな幼馴染が危機な時に自分が何も出来ない事を悔やむルフィ、そして仲間達

「いや。助かる方法はあるかもしね。」

ふいに、そういうたのは、今まで黙つて話を聞いていたドレークだ。

「何だと？」

ドレークは静かに言つ。

「効いた事がある。呪術師は新しい呪術を覚えた時は、万が一自分に跳ね返った時対処できるように、その呪術を解除する術も覚えるという。」

あつ、つと声をあげたのはネルだ。

「そういえば、そのお婆さんもそう言つてた！」

「じゃあ。呪術師を見つければ！」

「ひょっとしたら、解除する術を知っているかも知れないな。」

ルフィ達は一つの可能性を、見つけ出した。

「だが、どうやって見つけるんだ？呪術師なんて、あんまりいないしな。」

ゾロはそう指摘する。

「沖田だ！沖田って呪術使えるだろー。」

「沖田？」

「ジャイル国¹の騎士よ。ジャイルでは珍しい魔術を使って、呪術も使えるの」

「だがナミの話じゃ明日の国境の海はかなり荒れるらしいし、明日は国境の海は、航海出来ないと」

「次に、行けるようになるまで、一人は持つかしら。」

また、新たな問題が発生した。呪術師は少数で、ほとんどが隠れて暮らしているのだ。呪術師を見つけるまで、一人の体力が持つかどうか。

「心当たりがある。」

ドレークは言つ。

「この島から船で二時間くらいかかる島にレニス山²という山がある。そこに『魔術師』と言う異名を持つ呪術師がいるらしい。そいつの呪術の腕はかなりのものだ。もしかすると」

「二人を助けることが出来るんだな！」

ルフィは喜んでいる。

「でも、あなた。何故そこまで私達に？」

ロビンが聞く。

「遺跡の時の襲つた事の詫び、かな。」

そして翌日³の早朝。ルフィ達は『魔術師』がいるという島へ向かうため、近くの港町に着いた。

そこには、一隻の船がある。羊の頭が船首のキャラベルだ。

「これが、ルフィイ達の船？」

「ああ！ゴーイング・メリーア号。俺達のもう一人の仲間だ！」

ギルドなどの島を多く行き来したり、国境を越える者達は連絡船ではなく、個人的に船を持つのだ。ただしルフィイ達は、国境を越える程の航海術を使える者はいないため、メリーア号はこの港に置いていたのだ。ロビンが多少航海術の腕があるので、動かせる。

ルフィイ達は船に乗り込み出航する。

「頑張れよ。絶対に助けるからな。」

ルフィイは、意識がない二人に声をかける。チョッパーはその横で一人を診察する。

「おかしい。バアルモンの方が呪いの進行が早い。」

「そうなのか？」

「うん。一体どうして……。」

ルフィイ達は一度、甲板に戻る。

「にしても、その『魔術師』ってのは一体どんな奴なんだ？」

ゾロが呟つ。いくらその山に登った所でどういう風な者が分からなければ意味がない。

「俺も、噂ぐらいでしか聞いたことがないのでな。会った者もほとんどそいつの顔を見ていないと、後、あまり口を開かないから、男なのか女なのか、若いのか、老いているのかも分からぬ。特徴と言えば『魔術師』はいつも白いフードを被つてゐる、後腰に剣を差しているとか。」

「それにしても、『魔術師』か。」

ネルが呟つ

「魔術を扱える人がいない。シーラインにとつて、その人の呪術は魔術みたいだと思って言われてるのでしきう。」

「そういえば、あのクレインって言う奴、『魔術を使えない所は乱暴者だ』とか何だか見下すような事言つてたよな。」

「失敬だなそいつ！」

「聞いた事がある。ガゼル王国やキムラスカ王国やマルクト帝国の
ような、魔術が発達している国の魔導師は、魔術を扱える人が極端
に少ない、ジャイル国や、魔術を扱える人がいないシーラインや、
ヒノモトを見下す人がいるとか。もちろん王はそれを許してはいな
いけれど。」

「別に魔術が無くたつて俺達には構わない事だけどな。」

ルフィが言つ。

それから一時間後、ルフィ達は島に着いた。

「さて、と。じゃあそのレミス山に向かうか！」

ルフィが言つ。

「ウソップは俺が背負うよ。」

チョッパーは本来の姿の、トナカイとなり、ウソップを背負う。バ
アルモンはゾロが背負うようだ。

「じゃあ早速。」

「あんたら、あの山に行くなもりかい？」

一人の男が話しかけて来た。

「ああまじゅつづホツ！」

ゾロに頭を叩かれる。

「あんまこっちの目的を言うんじゃねえよ。」

「知り合いが少し具合が悪くて、レミス山には薬草が生えていると
聞いたので採りに来たのよ。それでレミス山がどこにあるか教えて
欲しいのだけれど

船の中でドレークは、レミス山には数多くの毒草や薬草があると聞
いたので、ロビンはその情報を元にして言つた。

「ああ。それならこの町を北に言った所に、霧の深い山があるそれ
が、レミス山だ。」

「そう、ありがとう。」

「あんたらは、知らないかも知れないが、あまり山の深い所まで行

かない方がいい。あの山には『魔術師』がいるからな。」

「そんなにヤバイ奴なのか？」

ルフィイが聞く。

「もちろんだ。『魔術師』に頼めば、誰でも呪える。ある金持ちの男は、財産も家も失われ、ある貴族は地位を失墜、ある者は落石で重傷となるなど、必ず不幸にするらしい。」

「それだけじゃねえ！『魔術師』は人を呪い殺せるらしい。もう何人もの人間が奴の呪いで・・・。」

途中で割つて入つた男も青ざめている。

「それに、奴は自分の依頼人でさえ不幸な目に会わせる！事実、奴に依頼をした男が崖から落ちて足の骨を負つたらしい。」

話を聞いていたチョッパーの顔が段々青くなる。

「くれぐれも、奴には近づかない方がいい。そしてこの島では、『魔術師』の名はあまり言わない方がいい。」「

男達と別れた後、ルフィ達はレミス山に着き、登る。

「ルフィ本当に大丈夫なんだろうな。」

「何、だよそいつじゃなきや治せないだろ。」

「だつてさつきの話聞いただろ！ルフィ達だつてきつとー。」

先程の話でチョッパーはかなり怖がつている。

「人を呪い殺せるほどの呪術師なら、ウソップ達を治す事も出来るでしょ。」

「まつ確かにそうだな。」

「で、でも本当に大丈夫かな。」

ネルも少しビビついている。

「にしても濃い霧だな。しつかり道を見なきや迷うなこれじや。」

「ゾロなら、濃い霧じやなくても迷うけどな。」

レミス山はふもとを少し登つてから深い霧になつていた。数メートル先も見えないくらいだ。

「ここまでの霧だと道を外しやすいな。」

ドレークもそう呟くと、ふとある事を思つた。

(ひょっとして……)

「んっ？ 何だあれ？」

ルフィイは、霧の中で明りを見つけた。まるでカントラのよつだ。「行つてみるか。」

ゾロの言葉で、ルフィイ達は向かつ。

「これつて……家？」

それは家の明りだった。レンガで造られた小さな家が何軒がある。

「何なんだろうここ？」

ネルがそう呟いたとき

「何者だ。」

「！」

突然の声。よく目を凝らすと霧の中から、黒いロープを着た集団が来る。振り向くと後ろからもだ。

「囮まれたか。」

ドレークはそう呟く。

「よそ者が来るのは久しぶりの事だ。」

「何用だ。」

「また誰かを呪おうと言つのか？」

黒いロープ達はルフィイ達に問いただす。見ると、チョッパーとネルは青ざめている。

そんな中でも

「『魔術師』はどうだ！」

ルフィイははつきりと言つ。

「やはり、呪いに来たか。」

「ここに来る者はいつもそうだ。」

そう黒いロープの者達は口々にそういつ

「違う！ 仲間の呪いを解いてくれ！ 」

それを打ち消すかの様にルフィはそういう。

「何？」

「仲間が一人のろいで苦しんでいるんだ。俺達じゃどうにも出来ないだから『魔術師』に会いに来た！頼む！あいつらを助けてくれ！」ルフィは頭を下げる。

「・・・・・。」

しばらく沈黙が続くが

「そのような事で俺に会いに来た者は初めてだ。」

沈黙を破った者は、霧の中から現れた。周りとは違った白いフードを被つた者だ。声を聞くとどうやら男のようだ。おそらく彼が魔術師なのだろう

「しかし…」

「構わない。」

黒いローブの男が言うが、白いフードの男は、カードを見ながら静止する。

「今日は、特別な者が来ると出たからな。来い。」

白いフードの男は、ルフィ達にそいつ、霧の中へと行く。

第七話 魔術師（後書き）

銀時「おいおい、大丈夫かよこの男かなりやばい噂があるな。まつ俺は別に。」

作者「銀さん。ひざが笑っているよ。・・・・あつ！あそこ！、フロンティアの方のルーチェモンフォールダウンが！」

ズザザ

作者「何やつてんの？」

作者「ば、バツカ野郎。ルーチェモンなめんなよ。七大魔王だぞ、七大魔王。」

作者「ふうん。まあ銀さんは置いといて感想お待ちします！」

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意（前書き）

銀時「今回。かなり遅かつたな。」

作者「すみません！最近いそがしかつたから！」

神楽「黙れネ。お前の書くスピードは亀アルか？」

作者「うぐつ・・・。」

新八「ちょっと！神楽ちゃん！いくら出番が無いからってそれはないんじゃない！？」

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意

白いフードの男、『魔術師』の後を追つて来たのは、先ほどの家と同じだが、大きさは先程の家よりも小さい。扉を開けると、家のほとんどがこの部屋に使われているような部屋に入る。家具は全くと言つていいほどなく、床には、魔法陣が書かれ一いつの本棚にはよくわからない本が並んでいる。全員が入れば身動きがとれないでの、ゾロが外で待つことになった。

部屋の中央にウソップとバアルモンを横にする。『魔術師』は胸の模様を見る。

「これは、悲相の呪いだな。
「悲相の呪い？」

ルフィが言つ。

「強力な呪術の一つだ。日に日に体を蝕み、やがて呪いを受けたものの命を奪う。」

「治せるか？」

「当然だ。しかし、解呪のために必要な薬草がない。」

「それって、どこにある？」

ルフィが強く問う。やつと仲間を救えるからだ。

「この山の山頂にある、『水月草』と言う花がある。それがあれば治せる。」

ふと、『魔術師』はカードを見る。

「しかし、この長鼻はともかく、この者が間に合つかどうか。」

バアルモンの方が進行が早いと船の中でチヨツパーは言つていた。

「それでも、治せるかもしれないんだろ！だつたら俺がその花を探つてくる。」

ルフィはそういうて、家を出ようとすると

「姿形も分からぬ花をどうやって探す。」

「あつ。」

スツ

『魔術師』は立ち上がり

「俺も行こう。こここの地理には詳しい。」

「そつか。ありがとな！ そういえばお前名前なんていうんだ？」

『魔術師』の動きが一瞬止まる。

「何故そのようなことを聞く？」

「だつて、何て呼べばいいか、わかんねえし。俺はモンキー・D・ルフィ。ギルド『麦わら色の瞳』のリー・ダーだ！」

「・・・」

しばらくの沈黙の後、魔術師はフードを脱ぐ。現れたのは、金色の長髪で、額には三角形の刺青のようなものがあり、赤い目で、無表情な男の顔だ。年はまだ若く、ゾロと同じか、1、2歳程上のなぐらいだ。

「バジル・ホーキンス。それが俺の名だ。」

ルフィ達は、山頂を目指して、上る。先頭は山の地理に詳しく、『水月草』の姿を知っているホーキンスだ。ホーキンスの話によれば、レミス山はさほど高い山ではないが、霧が深いため、迷いやすい。ホーキンスと同じくこの山に住んでいる先程の黒いロープの男達でも、少しでも霧が薄い田だけしか山頂に行かないらしい。霧で迷えば、数時間は帰れず、そこで時間を取つていたら、進行が早いバアルモンでは間に合わないらしい。

途中では、魔物が現れる事もあつたが、すぐに倒したり逃げられたりした。

「そういえばよ。」

ルフィはホーキンスに聞く。

「何だ？」

「お前らって、何でこんな霧の深い所に住んでいるんだ？」

「呪術師は、外部とはあまり交流を好まない。」

「じゃあ。あのローブの人達も？」

「ネルが聞く。

「ああ。多少は呪術は使える。・・・不思議なものだ。」

「なにがだ？」

ルフィが聞く。

「普通の人間は、呪術師とは、あまり話そうともしない。それなのに、お前は話しかけてくれた。」

「別に不思議な事はないだろ？」

ルフィは言葉の意味が分からぬようだ。だがネルはある事を思い出した。呪術師は呪いを操る者。そのためか人々は呪術師とは、関わろうともしない。自分が呪術にかかるかも知れないからだ。もちろんそれは、誤解でそれでは、剣で斬られるかも知れないから剣士と関わらない。魔術にかかるかも知れないから魔導師とは関わらない事と一緒にある。

「勝手な事だな。」

ゾロが呟く。

「自分が、呪いにかかるのがいやだから、関わらないとか言つて、呪いたい奴がいたら、手のひら返して頼むなんてな。」

それから、数分後ルフィ達は先に青い色がついた棒を見つけた。

「目印だ。山頂は、もう少しだな。」

ホーキンスがそう言った時。

ビュッ

「うあつ！」

ルフィに向かって大きな針が数本来た。ルフィは寸でで、避ける。長さはゾロの身長の半分くらいだ。

「なんだ？」

その後

ビュウ

「うわっ！」

突然の強風がルフィ達を襲つた。

「うわああ！」

人獣型なら、この中で一番小さいチョッパーが飛ばされるが

フワアア

ガシツ

ロビンの生やした手により、捕まつた。

「ありがとうロビン。」

「どういたしまして。それより一体。」

先程の強風のおかげか、霧が少し晴れ、攻撃をした者の姿が見える。数は二体。一体目は、茶色のトカゲを象なみに大きくして、爪は鋭く、目は黒い。尻尾には、鋭い針がある。飛ばされた針はこれなのだろう。二体目は、象よりも大きな黒い鳥のようだが、羽の一部は、黒い水晶のような形で、鋭い牙を持つ。

「こいつらが。」

ルフィ達は、拳や、武器を構える。

「しかしこのような魔物はいなかつたはず。」

「考えるのは後にしる。」

ホーキンスはある疑問を言うが、ゾロに後にしておけと言われる。

ビュウ

再び風を起こす鳥の魔物。しかも先程よりも強い。

「皆何かにつかまれ！」

ルフィはそう言って、近くの木に捕まる。ゾロとホーキンスとドレークは刀と剣を地面に突き刺し、

ネルは、自分の後ろの方に、氷の壁を作り、地面に伏せ、チョッパーは必死に地面にしがみつき、ロビンは腕と腕を連結させ、自分を止める。しかし

ビュビュウ

トカゲが、突風の中自分の針を発射する。

「うおっ！ ってうわっ！」

ルフィは避けるが、突風で飛ばされるので、すぐに地面にしがみつ

く。

「厄介だ。しがみついていなけりや風に吹き飛ばされるし、動かな
きや針の餌食か。」

ゾロが言つ。

「俺の魔術じや、時間かかるし針の餌食になる。」

ネルも考える。

「おつーそだ。」

そう言つて、ルフィイは立ち上がり
ボコッ

足を地面に沈め

「ゴムゴムのバズーカ！」

ドゴッ

ぐえつ

突然のルフィイの攻撃に、鳥は避けきれず、当たつてしまつ。

「よしつ！」

「でも！針がまだ。」

ネルがそう言つた直後

ビュツ

針がルフィイ目掛けて発射される。

「あつーやべー動けねえ！」

「何やつてんだお前！」

ゾロは走つてルフィイの元へと行き、針を落とす。

「わるいゾロ。」

ルフィイの足は、地面から抜けた。

ダツ

ルフィイとロビンとネルは鳥の方へ、ゾロとチョッパーとドレークと
ホーキンスはトカゲの方へと向かつ。

「ルフィイあれ！」

ネルが指差す方を見ると、鳥の背中にあの黒い機械が乗つていた。

「まさか、クラインが？」

ロビンが咳く。

「オッ

鳥は、竜巻を起こし、ルフィ達を襲う。

「はっ！」

ネルは、氷の壁を作るが、

ベキン

すぐに壊される。

「ゴムゴムのピストル！」

バサツ

ルフィが攻撃するが、鳥は、飛んで避ける。

「これならどう？」「

フワツ ガシツ

ロビンは、鳥の右の羽に数本手を生やし、連結させ、動きを止める。それにより、鳥は少しの間落下するが

ゴツ

鳥は、口から火を吐き、ルフィ達を襲う。

「くつ！」

一方

「ヘビー・ゴング！」

ガキン

「つうー！」

チョッパーはパンチをするが、トカゲの鱗が硬い。

「はっ！」

ズバツ

ゾロが斬るが、鱗の下は少ししか斬れてない。

「ちつ 案外かてえな。」

すると

ビシュ

再び針を発射する。

「ぐつ！」

「ゾロ！」

「大丈夫かすっただけだ！」

ゾロはかすっただけですんだが

ドスツ

「なつ！」

針は、後方にいたホーキンスに当たり、貫通する。ホーキンスは倒れこむ

「お前！」

「魔術師！」

ゾロとドレークが叫ぶが。

しかし

「安心しろ。」

ホーキンスはむくりと起き上がる。体には、どこにも傷が無い
「今日俺は死なない。一体犠牲になつたか」

ズズツ

ホーキンスの腕から、藁人形が出てくる。藁人形の方には、針が貫通したような穴が空いてある。

「お前能力者だったのか。」

チヨツパーはそう呟く。

「ああ。」

「二人共、よそ見はするな！」

ドレークが一人に向かつて言つ。

「にしても、硬いなあの鱗。内側は、少ししか斬れねえ。」

「ああ。そうだな。」

パチッ

ゾロと会話をしながら、ドレークは腕のホックを外す。

「ならば、牙を立てるか。」

「何つ？・・・！」

ゾロがドレークの方を見ると、変化がおきていた。青い目は爬虫類のような目に変わり、肌は、緑色の鱗が現れ、爪は鋭くなり、爬虫類の尾が生え、歯は鋭くなり、そしてギヤオオオオン！！

それは、人の体をしておらず、人よりも数倍大きく、トカゲよりも大きい。それは、恐竜だ。

「動物系か。」

ホーキンスが呟く。

「かつ、カツチヨイイーーー！」

「恐竜だ！」

ルフィとチョッパーが、目を輝かせる。

「お前ら！よそ見すんなよ！」

ゾロが、二人を叱咤する。

ドッ

恐竜となつたドレークは、トカゲに向かう。

ビュン

トカゲは尻尾を振るが、避けられ

ガブッ

ドレークに噛み付かれる。今度は鱗の下も、効いている

ジャアアアア

トカゲは、叫び、ドレークに突進するが

「とりあえず、感謝する。次は俺だ。」

ゾロが迎撃つ。

ビシュウ

少しの足止めのためか、ホーキンスは、どこからか出した釘で攻撃する。

ゾロは、三本の刀を、しまうが、白い鞘の刀に手をかける。狙いは、ドレークが傷を負わせた、背中の左側の部分。

「一刀流。獅子歌歌！」

ビシュ

ゾロは、鉄をも斬れる斬撃を放つ。

ドサツ

トカゲは倒れた。ゾロは、ドレークと自分が傷を負わせた部分を見る。鱗が、剥がれた部分に、あの黒い機械が斬られていた。

シユル

ロビンは今度は、鳥の口を塞ぐ。鳥は、竜巻を起こうとするが、「紅蓮の槍よ、我が命に従い敵を撃て。フレイムランス！」

ドゴツ

ネルは、巨大な炎の槍で、左の翼に攻撃する。ひるんだ鳥が落ちる。そして地面に着く前に

シユツ

「ゴムゴムのライフル！」

ドゴツ

ルフィは鳥の背中にある黒い機械を破壊する。

ドサツ

鳥は地面に倒れた。

「終わったな。」

ゾロが呟く。

「にしても、スゲエなお前！恐竜になつたなー恐竜ー！」

「もう一回ー変身してくれー！」

「えつ？」

ルフィとチョッパーは田を輝かせながら、ドレークに向かう。

「二人共、今は山頂に行かないよ。」

「どうやって行く？」

ホーキンスがネルに囁つ。

「えつ？そりや、さつきの道印と、道に・・・えつ？」

そう、ネルは気がついたのだ。自分達は道から外れ、そして道印が見えない事を。戦いのせいで道を外れてしまい、そして霧も元の濃い霧に戻つたのだ。

「じゃ、じゃあ！速く元の道に戻ろう！」

「ちなみに、俺も一度迷つた事があつてな、その時は数時間もかかつた。」

さらなる、追撃に

「でも、速く、速く薬草を見つけないと。」

「これ以上、時間をかけたら。」

「・・・」

「ウソツク・・・バアルモン。」

「くつ。」

戸惑うネルに、少し焦りを見せるゾロ、沈黙するロビンに、二人を思つチヨツッパーに、考え込むドレークそしてホーキンスは（やはり、運命じや変えられぬか。）

「何やつてるんだよ。お前ひ。」

「えつ？」

声をする方を見るが、霧のせいでルフィの姿は見えない。しかし近くに腕のようなものが掴まれている木がある。

「お前らー捕まつとけよー！」

「えつ？」

すると

「ゴムゴムの～ロケットー！」

ビショーン

『えええええ！…？』

ゾロ達は上へと打ち上げられた。

「テメエルフイ！何するんだ！」

ゾロが真っ先に叫ぶ。

「へつへつ！こいつ言づ風にしどきや山頂にすぐ着くだりうっ！」

ついにルフィ達は霧を抜ける。その後は自由落下となるが

「麦わら。お前のやり方はめちゃくちゃだが、どうやら成功したようだ。」

「えっ？」

落下しながらホーキンス指差す。そこには、霧の中での唯一霧がかっていないう所があった。

「頂上はこの山で唯一霧がかかっていない場所だ。」

見ると頂上には、高い木がある。

「よし！しつかり捕まつてや！」

ビショ

ルフィはその木に向かって、手を伸ばす。ゾロ達はもう一方の手や足を掴んだ。

シユツ

ルフィ達は一気に木の方に、着いた。

「ここに、花があるんだな。」

ルフィ達は花を探す。すると

「あつ！おいホーキンス！ひょっとしてこれが

チヨッパーは、ホーキンスに、水色の花を見せる。

「ああ。『水月草』だ。」

「よつしゃああー！じやあ速く、戻るー！」

ルフィ達は、降りようとすると、

バサツバサツ

「えっ？」

大きな羽の音のする方を見ると、あの鳥の魔物が飛んでいた。

「ちつ！まだ戦いてえのか！」

ゾロが刀を抜くが

キュル キュルキューン

鳥が鳴く。

「チョッパー何ていつてるんだ？」

ルフィがチョッパーに言ひづ。

「えつと『ありがとう。あの機械を壊してくれて。』
やはり、あの機械が操っていた。

キュルキュー

「『だからその礼として、お前らを降ろしてやる。お前らが、山を
降りるより数倍速いから』って。」

「本当か！」

キュン

「『さあ。速く乗れ』」

ルフィイ達は、鳥に乗る。途中でネルは自分が攻撃した部分を回復魔
術で癒す。

バサツ

ルフィ達を乗せた、鳥は一気に山を降りる。

一方

集落では

「あれから、もう三時間か。」

「ホーキンス様は『無事だろうか。』

「まさか、また迷つてるとか。」

ホーキンスの帰りを待つ黒フード達。

その時

「うわああああ。

空から誰かの声が聞こえる。

「えつ？」

黒フード達は上を見る。

「あの鳥野郎！途中で、放り投げやがつて！」

「着陸する場所がなかつたって言ってた！」

「でも、これつて、普通だつたら。」

「

ゾロは、鳥を怒りながら、チョッパーは驚きながら、ネルも目を見開いて、ロビンは少し微笑をして、ドレークはどうするか考え、ホーキンスは無表情で落ちてきた。

『ええええええええ！？』

そしてルフィは

「ゴムゴムの～風船！」

自分の体を膨らませて

ポンッ

地面に。しかし全員ルフィの膨らんだ体に、よつて直撃は免れた。

「いたた。皆大丈夫？」

ネルは、ルフィ達を捜す。腕にはすり傷がある。

「ありがとな！鳥！」

「つたくよ。」

「ネルお前怪我をしてるのか！？」

「あの鳥。あまり高くはない所で、落としてくれたのね。」

「そうだな。」

「ふむ。『高所に注意』とはこの事か。』

全員、少し土で顔が汚れてたが、傷はない。

「何で、皆無傷なの！？」

「えつ？だつてルフィのクッショーンで、」

「いやいや！それでも、普通は怪我はするでしょ！」

「知らないのか？シーラインの住人は、他の国の奴と比べて、体が丈夫なんだ。あれくらいの高さでも、普通は少し怪我をするくらい

だろ？」

ゾロが答える。

「いやいや！普通は運が良くて、大怪我でしょ！」

「お前達。戻つたぞ。」

「あ。ああ。お帰りなさいホーキンス様。」

ホーキンスが、黒フードの男達に話しかける。

数分後

ホーキンスは、取つてきた『水月草』で、薬を作り、一人に飲ませた。

「う・・・こ、は？」

バアルモンが目を覚まし。

「あれ？ 確か俺扉を開けたら、誰かに。」
ウソップも目を覚ます。

「ウソップ！」

ルフィはウソップに抱きつく

「うわっ！ ルフィ！ ？」

「よかつた。本当に良かつた！」

「俺は、一体。」

「呪術が解かれたのよ。」

ロビンが答える。

「よかつたな。麦わら。」

ドレークがそう言つ。

「つて！ お前つて確か！ 遺跡の！」

ウソップは後ろに下がるが、近くにホーキンスがいた。

「うあつ！」

「心配すんなよー。こいつら悪い奴じやねえよー。」

ルフィはそう言つた。

その後、ルフィ達は、家の外に行き、ゾロと合流する。

「つて事は、俺とバアルモンは呪術にかかつたけど、こいつに助けられたと。」

ロビンから事情を聞いた。そしてルフィはホーキンスに向かって

「ありがとな！ ウソップとバアルモン助けてくれて。」

「俺は頼まれた事をしただけだ。」

「あの、ホーキンス。聞きたい事があるんだ。」

ネルが聞く。

「何だ？」

「ホーキンスが、色んな人を不幸にさせたのって本当？」

「ああ。依頼された。弱い者を騙すなどをした男で、必要以上の税金を市民から徴収したり、こき使つたりする貴族などを呪つたな。ホーキンスはあっさりと答えた。どうやらホーキンスが呪術を使つたのは、悪人だけのようだ。

「でも、いくら悪い人だからって。呪い殺すなんて。」

ネルが呟く。すると

「何を言つている？俺は不幸にした事はあるが、呪い殺した事は一度もない。」

「えつ？」

ホーキンスは首を傾げる。

「呪術師にとつて、人の命を奪う呪術は、禁術とされているからな。俺もそんな呪術はあまり知らないが。」

「でも、『悲相の呪い』は、」

「もし、誰かが禁術を使つたらと呪う事で、禁術の解呪の方法は覚えさせられたな。」

ネルはぽかんとなる。

「じゃあ。依頼人が崖から落ちたつて。」

「あれはおそらく、この山の濃い霧で道を踏み外して落ちたんだろう。つで、『魔術師』にやられたと思ったんだろう。」

ドレークが言う。

「じゃあ。あの話つて。」

「おそらく、ホーキンスを恐れるあまり、話に尾ひれがついたのだろ？」「

つまり、噂はほとんどが、誤解が生んだ物だったのだ。

その後、ルフィ達は集落を後にした。

「じゃあな！色々と助かつた！」

ルフィは手を振つた。

「行っちゃいましたね。」

「なんつーか。ああいう依頼人は初めてだつたよな。」

「まさか呪うんじゃなくて、呪いを解く事になるとは重いませんで
したね。」

黒ローブの男達は、口々に言つ。しかし、ホーキンスはその中で、
近くの木箱に座り、カード占いをしていた。

「ホーキンス様？」

黒ローブの男達の一人が聞く。

「・・・。」

ホーキンスは黙つたまま、カードを見る。

「やはり、か。」

「？」

突然、ホーキンスが立ち上がる。

「少しの間、こここの事を任せる。」

「えつ？」

「俺は、この山を降りる。」

衝撃的な一言に、戸惑う黒ローブの男達。

「ど、どうしてですか！？」

「数日前から、占いで、近々ある事が起きるという。それはこの島
だけでなく、それ以上の事だと。」

「えつ？」

「気になるので、少しばかり外を見ていく。・・・それに。」

「それに？」

「何か想像をはるかに超える事、占いの結果が変わるかもしねり。」

「

「ど、どういう事ですか？」

ホーキンスは少し、間を置いて

「あのバアルモンと呼ばれた者には、死相が出ていた。」

「！」

「本当なら、あの男は、薬は間に合わず死んでいた。」

「じゃ、じゃあまさか！」

「ああ。あいつらは、運命を変えたのだ。」

「そんな、そんな事つて。」

黒ローブの男達にとって、ホーキンスの占つた結果が違う事には、驚いたが、同時に安心した。

ホーキンスは、自分や人の運命を占う事ができ、人の死相が見えるのだ。何度も変えようとしたが、帰られなかつたのだ。ホーキンスはその力が原因で、生まれ育つた村で、幼い頃から化け物呼ばわりされ、酷い迫害を受け村を追われ、この呪術師の集落に着いたのだ。その運命が変えられた。

「運命は変えられた。その事に興味を持つただけだ。」

そう言って、ホーキンスは準備のため、自分の家へと向かつた。

(特別な相手・・・確かにそうだつた。)

ホーキンスは心中で思つた。彼にとって外界の者は、自分を迫害した村人達、恨みや、憎しみを持って依頼しに来て、自分を恐れる依頼人達だけだった。そんな中であつては、ルフィイは、恐れもせずに、接し、そして運命を変えた。世界には自分の想像をはるかに超える事がある。その興味の方が、ホーキンスが山を降りる事を決めた一番のことだつた。

「世界、か。見てみるか。」

ホーキンスはそう呟いた。

第八話 薬草を求めて、魔術師の決意（後書き）

銀時「つーか、何だよ。体が丈夫つて。」

作者「いやだつて。普通に考えたら、ONEPIECEの人達つて何だかんだ言つて体丈夫でしょ。ホーキンスは黄猿あんなに攻撃されたのに、回復したし、アプーも光の速さで、蹴られたのに、生きてたし、ゾロも、いつも普通だつたら死ぬ攻撃でも、生きてたし、

」

銀時「いや、あれは色々とだな、つーか良く考えたら、ゾロつて悪魔の実食つてないのに、何だよあの体。ひょっとしたら、ルフイよりも、ダメージ多いのでは？」

作者「確かに。」

銀時「つーか。いつの間にか、ゾロの話になつちましたな。」

作者「そうだね。次回もお楽しみにしてください！そして感想お願ひします！」

第9話 船上の戦い（前書き）

クラント「もうこえぱ、僕つてよべ、間違えられたよね君に。」
作者「いや、本当に申し訳あつませんークラントさん！」

第9話 船上の戦い

山を降りて、ドレークと別れたルフィ達は、宿屋で一晩泊まった。その宿屋の主人は噂好きで、ある事を言つた。

「実は、この町の近くの町で、盗賊団が、いたんだが、その盗賊団のボスが突然倒れて、体には、デッカイ針で貫かれたような傷があつたんだ。そいつはすぐに海軍に捕まつたけどな。聞く所によると、アイツ、最近あの『魔術師』が住む山に入つたんだとよ。きっと『魔術師』の呪いだ」

ふと、ルフィ達はあの戦いで、針で貫かれたのに無事だつたホーキンスの事を思い出す。おそらく彼の能力だろう。そしてルフィ達は知らない。ホーキンスが山を降りようとしている事を。

翌日、ルフィ達は、メリーワー号ではなく、他国行きの連絡船に乗つた。「にしても、確かにナミの話じゃいつも良くなるか分からないつて言ってたよな。」

ウソップが呟く。

「国境の海の天候は、変わりやすい。こういう事もあるのよ。」

「いつかメリーワー号で、国境の海を越えたいよな。」

ルフィが呟く。

「確かに、他国行きの船代は高いし、ナミが手伝ってくれればいいけど。他に腕の良い航海士知らないし。」

ウソップが呟く。

「前に断られただろ。」

ゾロが呟く。

「・・・・・。」

「ははは、それにしても、どうしてキムラスカへ行こうと?」

無口なバアルモンに苦笑しながら、ネルはチョップバーに声をかける。「ごめんな、でもあんな事があつたんだ。怪我や病気や毒だけじゃなく、呪術の治療法も知らないと。もうあんな事には。」

チョッパーが、一番今回の事に影響を受けていたようだ。

「チョッパー！」

「そういえば、ネル。お前なんでガゼル行きは、あんなに反対したんだ？」

ウソップが聞く。最初はガゼル王国に行こうとしたが、ネルに反対されたのだ。

「あ、いや最近ガゼルって何かと物騒だし。」

「物騒？」

「確かに、処刑寸前で脱獄した、凶悪犯の事ね。でも、他国に逃げているかもしれないし。」

ロビンが言う。

「ま、まあそんなんだけど。もしもって事があるかもしれないし（今、ガゼルに戻ればきっと。）

ネルは何とか、口を開かす。

「？」

ウソップはその態度に疑問を抱く。

その時

「うつわあ。お前何で生きてるの？」

「お前は、油断しそぎだ。」

「！－！」

ルフィ達が、振り向くと、そこには船の縁にもたれているクラントと、黒いロングコートの下に黒い和服を着て、黒い髪で、黒いマフラーを巻き、ベルトには、一本の刀がさしてある背の高い男がいた。

「あつ！お前！」

「君とはもう会いたくなかったのに。」

「お前、いい加減その差別癖はやめる。」（ひかりもイラつぐ。）

「僕だつて、君みたいな魔術も使えない野蛮なヒノモト出身の奴とペアを組むなんて屈辱だよ。」

「よし、お前そこでジツとしている、真っ一二にする。」

味方同士とは、思えない会話をする。

「おい！無視すんな！そしてお前は誰だ！」

ルフィは怒っている。

「つるさいな。君も呪うよ。」

「お前も少しち黙れ。すまない名乗つていなかつたな。俺は黒月紅くろつきゆき。
こいつと同じ組織の者だ。まずは、貴様の仲間を巻き込んでしまつた事を詫びる。すまなかつた。」

案外、丁寧な紅だ。

「ちよつと、こんな奴ほつといてもいいだろ？」「

「俺は無駄な犠牲は出さない主義だ。」

「それで、あなた達の目的は？」

ロビンが聞く。

「ああ、その男の抹殺だ。」

紅はバルモンを指差す。

「まさか、解かれるとは、思つていなかつたからね。」

「・・・。」

スツ

バルモンは銃を取り出す。現在甲板には、ルフィ達しかいない。

「おい！今ここで、戦つたら船が」

ウソップが忠告する。

「別に、僕は君達と違つて魔術が使えるから飛んで逃げるし、こんな船どうでもいいよ。」

「お前！」

「舞えよ漆黒の風、シャドーワイング」

ビュ

黒い風の刃がルフィ達が襲うが、何とか避ける。しかし

ビュッ

紅が刀を抜き、迫るが

ガキン

「やられねえよ。」

ゾロが止める。

「ほう。三本の刀を操るか。」

「ああ。俺は三刀流なんでね。」

「俺の知つてゐる武人は、六本の刀を操る者がいたな。」

「そいつは、お目にかかりてえな。」

「紅とゾロの鍔せり合いとなる。」

「ルフィー！こいつは俺に任せろ！お前は」

「ああ！ゴムゴムのピストル！」

ドッ

クラントに向けて撃つが、避けられてしまつ。一応船を壊さないようにしている。

フワー

ヒュル

ロビンが、クラントの体に手を生やすが

「邪魔。」

ドツ

自分の周りに衝撃波を出す。

「くつ！」

「その力、悪魔の実だっけ？本当に奇妙だね。」

「うるせえ！」

一方

紅とゾロの鍔競り合ひは、意外な形で終わる。

ボウ

「なつ！」

突然ゾロの前に、黒い刃が現れ、ゾロ曰掛けて振り降ろされる。

スツ

ゾロは、すぐに後退して避ける。

「魔術か？」

「いや、違う。俺は闇の『バサラ』の使い手だ。」

「バサラ？」

謎の言葉に首を傾げる。

「ウイングスラッシュユ！」

ビュ

風の刃が、クラントを襲うが、バリアで防がれる。

「何だ。君魔術が使えるのに、何でこんな奴らといってるの？」

「魔術が使えないからって、差別するのは間違つてるー。」

その時

ガチャ

「おいアンタら何をやつてるんだ！」

船の中にいた、船員が顔を出す。

「そろそろお終いにしろ。騒がしくなれば、余計な犠牲が増えるだけだ。」

「分かつたよ。」

ゴツ

突然海の中から、青い体の翼竜が現れる。

「な、何だ！？」

ウソップがかなり驚いている。

「ブレス。」

クラントが指示を出すと

ゴツ

翼竜は、口から勢い良く水を吐き出す。

「うわああ！！」

ルフィ達は、モロに当たつて、多くの木箱や樽と一緒にドボン

海に落ちる。

「な、なな何だつたんだ一体？」

船員は、目の前で起きた事が理解できていない。そしてあの二人と翼竜は何処かへと消えていた。

それから數十分後、とある海岸で
ザバッ

ある生物が、何かを引き上げている。それは樽だ。そこには、ルフィとチョッパーが何かのロープで括りつけられていた。他にも、木箱につかまって氣を失っているウソップ、同じくロープで木箱に括りつけられているロビン、そしてゾロとバアルモンとネル。そしてルフィ達を引き上げたのは、青いヘルメットを被った亀のような生物だ。

「ありがとうだカメ。」

亀のような生物は、海にいる者に手を振つてゐる。途中まで海にいる者に手伝つてもうつたのだ

「さて、どうしよう。とりあえずタイキの家に運んで置くカメ。それには。」

亀のような生物はジッとバアルモンを見つめる。

「んつ？どこだ・・・ここ？」

目を開けると、そこは、見慣れない天井だった。

「確かに、俺海に落ちてそれで・・・」

ルフィは、思い出そうとする。ルフィは辺りを見渡す。木造の質素な家だ。ルフィは、ベットで眠っていたのだ。

「おっ！ルフィ！」

声を出したのは、ウソップだ。

「ウソップ。無事だつたのか！？」

「俺もだ。」

「何とかね。」

他にもゾロもロビンもネルもいた。隣にはベットがあつて、まだチヨッパーとバアルモンが眠っている。

「何で俺無事なんだ？」

悪魔の実の能力者には決定的な弱点がある。悪魔の実の能力者は、海に嫌われ一生泳げなくなるのだ。

「一時的にネルが辺りを氷で固めて近くにあつた樽や木箱にお前らを括つておいたんだよ。」

「そつかありがとな。それにしてもこいつて。」ガチャ突然家の扉が開く。

「あつ！目が覚めたんですね。」

入ってきたのは、茶色の髪で、ゴーグルを着けた少年だ。

「お前が助けてくれたのか？」

「いえつ、俺の仲間が、引き上げてくれたんです。」

ルフィの質問に答える少年。

「そいつには、礼を言わないとな、」
ゾロが言う。

「お前も、助けてくれたんだな。ありがとうーえつと・・・名前何て言うんだ？」

「ついでに言うと」「ジーヴィだ？」

ウソップも質問する。

「俺は工藤タイキ。ついでここはレンス国の中エンスです。」

第9話 船上の戦い（後書き）

作者「次回は、シャウトモン達が登場しますー。」

銀時「にしても、お前自分のオリキャラの名前間違えるなんて」

作者「すみません。」

第十話 テジモン（前書き）

作者「もう一つの小説をずっと書いてたので、いつの更新が遅れてしまつて、すみませんでした！」

第十話 テジモン

「レンス国?」「ルフィが首を傾げる。

「人間や獣人やエルフ、それに『デジモン』が共に暮らす多種族国家ね。ハーフエルフを受け入れる数少ない国とも呼ばれてるわ。」

ロビンが説明する。ハーフエルフは人間とエルフとの間に生まれた種族だが、異なる種族から生まれた種族のため『穢れた種族』と呼ばれ迫害を受けていた。

「でも、今は二つに別れていると言われるけどここは?」

「ここは『月部』です。それで皆さんは」

そういえば、自分達の名前を言つてなかつた事に気付いたルフィ達
「俺はルフィ! ギルド』麦わら色の瞳』のリーダーだ!」

「ゾロだ。こいつと同じギルドだ。」

「ロビンよ。よろしく」

「俺はウソップよろしくな!」

「ネルだよ。よろしく。」

「俺は、チョッパー! ルフィ達のギルドの一員じゃないけど、今は

一緒にいるんだ。」

「よろしく。それでルフィさん達は何処から?」

「シーラインだ。」

「えつ!」

ルフィの言葉にタイキはかなり驚いていた。

「シーラインって、じゃああの『魔の海』を越えて?」

「魔の海?」

「シーラインとの国境の海は他の国じゃそう呼ばれているんだ。越えるのが難しいって呼ばれている。」

「ネルが説明する。

「確かにあの海は、素人が越えられる海じゃないしな。」

ゾロがそう呟いた直後

バン

突然、ドアが開かれる。

「タイキ！バアルモンが帰つてきたって本当か！？」

入つて来たのは、体は赤く、タイキよりも、小さな体の恐竜のような者だ。

「うおっ！」

ウソップとチョッパーが驚く。

「デジモンだね。」

ネルが言う。

「ああ。紹介するよ。シャウトモンだ。」

「お前らが、チビカメモンが言つていた流されて来た奴か。シャウトモンだよろしくな！それで、タイキ、バアルモンは」

その時

「うつ・・・俺は。」

バアルモンが目覚めた。

「バアルモン！」

タイキが駆け寄る。

「タイ・・・キ？俺は・・・レンスに来て・・・しまったのか？」

「ああ！」

タイキが言う。

「それにしても、お前が俺達の隊から離れたつて聞いた時は驚いたぜ！」

(俺達の隊?)

その時

「タイキ！」

外から現れたのは、オレンジと白の毛の巨大な狼の様な者で、尻尾や頭にドリルが生えている。

「ドルルモン。」

「西の森に、アイツらが、現れた！すぐに向かうぞ！」

「分かった。あの、無理をしないで」
バンッ

勢い良く、ドアを閉める

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3804w/>

望みと信念を胸に

2011年11月23日07時56分発行